

学生インタビュー

Student Interview

Vol.1

藝大の在校生は、公募展やコンクールなどで栄誉ある賞を受賞し、各分野の最前線で活躍している。若き才能が日々の努力と今後への意欲を語る

美術

Fine Arts

杉山由香

大学院美術研究科
建築専攻修士一年



1988年栃木県生まれ。東京電機大学卒業後、大学院美術研究科建築専攻に入学。2010年「サステナブルアイデアコンペ」最優秀賞、サステナブルデザイン国際会議にて作品発表。

学

部（東京電機大学）の卒業制作では、ワーキンググループのための福祉施設の設計をして、二〇一三年のJIA（日本建築家協会）全国学生卒業設計コンクールで金賞をいただきました。実際に山谷のドヤ街を調べてみると、いろいろな理由で仕事につけず、お金のない人たちが野宿したり、ひとりで悩んでいる状況がある。どうしたらよいかと研究を進めると同時に、自分の思いを発泡スチロールに落としてモデルをつくっていきましました。暮らす人たちが、辛い気持ちを癒せる場所でありながら、単なる建造物ではなく、隠されて目に見えない日本の貧困を世の中に知らせるような空間にもしたかったのです。

私

が修士の建築専攻に入った年の二〇一四年、ポラスグループが主催する学生・建築デザインコンペで最優秀賞となった「じじはばシェアハウス」

音楽

Music

岡本誠司

音楽学部器楽科
二年



1994年千葉県生まれ。3歳よりヴァイオリンを始め、音楽学部附属音楽高校卒業後、音楽学部器楽科入学。中澤きみ子、ジェラルブルーレ、澤和樹各氏に師事。

二

〇一四年に、ドイツ、ライプツィヒのバッハ国際コンクールで第一位とすることができました。自然な音楽性と、あるスタイルに偏らない柔軟でパランスのよい表現力が評価されたのですが、うれしかったのは、現地の聴衆の方々がとても暖かい拍手で応えてくれ、聴衆賞もいただいたことです。

三

歳からスズキ・メソードでヴァイオリンを始めたいのですが、幼稚園児にとっては、ほかに楽しいことがいっぱい、毎日練習するのはやっばりつらい（笑）。そこを母親や先生がうまくリードしてくれて。その後は中澤きみ子先生に習いました。中澤先生からは、楽譜の向こう側——作曲家は何を伝えたいのか、どういう思いを込めてこの曲をつくったか、そうしたところに目を向けるよう教えられ、今の自分をつくるのに大きな力となっていると思います。

映像

Film & New Media

曾根光揮

大学院映像研究科
メディア映像専攻修士二年



1990年静岡県生まれ。静岡文化芸術大学デザイン学部卒業後、大学院映像研究科メディア映像専攻に入学。2014年『写場』が文化庁メディア芸術祭で審査委員会推薦作品。

コ

ンピュータ・グラフィクス（CG）を始めたのはけっこう早く、中学時代です。ピクサー製作の『トイ・ストーリー』のようなCGだけによるアニメーションの映像が、手元のパソコンで本当につくってしまう、そのことに衝撃を受けました。

中

学高校時代はCG制作に明け暮れ、静岡文化芸術大学でもCG制作をつづけたのですが、そのうちCGとはいったい何なのか、CGでできる表現とは何か、と概念的でメタなほうに興味が出てきました。

C

Gの精度はどんどん高くなり、実写と紛うほどのリアリティを獲得しています。それに、映像の加工が可能となった現在では、実写とCGとは本質的には区別ができない。しかし、実写にはやはりそれでは出せないものがあります。また、例えば劇映画を見ているときは、フィクションとして見る

も、同じように弱い立場の人たちのための集合住宅です。従来の高齢者施設では、お年寄りを閉じ込めてしまうように思ったので、近所の人たちや子どもたちも抵抗なく入っている、外路との行き来が容易な、生き生きとして明るい空間が必要なのではないかと、提出したプランでした。

将 来高齢者が増えることは間違いないし、これから来る社会への不安もある。そうした中で、私のプレゼンテーションを聞いてくれた人たちだけでも、一緒に何か考えてもらえたらいいなと思ったのです。

研 研究室でのテーマは、新潟の新発田にある長徳寺で子孫のない人たちの合葬墓を立てるプロジェクトですが、修士制作では、やはり困っている人たちのために、なにか役に立つことを考えたい。そういうスペースを計画しようと思っています。

今 後も困っている人が救われる建築、社会の構造が見えてくる建築をめざしていくつもりです。人間が生きていくことや死ぬことは、どういうことなのか、また建築が生きるとか死ぬとかは、どういうことなのだろう——そういうことと社会問題とを結びつけて計画を立てられたらいいなと思っています。



「春を待つ橋の下」

敷地は山谷に近い隅田川沿いのスペース。貧しい人たちの屋根である橋を何層にも編みこみ、彼らのいのちを守る建築——セーフティネットをつくる

小

さいころからバロック音楽が好きで、不思議とバッハに引き込まれるものがありました。中学生ぐらいから、バロックチェロの鈴木秀美先生のレッスンも受けており、バロックヴァイオリンに夢中だった時期もありました。その経験から、ピリオド奏法（古楽器奏法）の考え方を吸収し発展させて自分の演奏の中に取り込んでいけば、モダン楽器の演奏の幅は広がっているいろいろなことができる、と考えるようになったのです。現在も、副科でバロックヴァイオリンの勉強を続けています。

音

楽学部附属音楽高校の三年間と藝大に入ってから二年間は、澤和樹先生に教えていただきました。お人柄や人間としての豊かさが、ヴァイタリティ、そうしたものが音楽、音のひとつひとつに表れている。こういう先生を目標としていきたいと思っています。

バ

ロック音楽のほかにも、実はブラームスが大好きです。プロkofイエフやシヨスタコーヴィチなども、噛み応えがありますね。また、室内楽でも弦楽四重奏団を組んで活動しています。今後、編成やレパートリーも広げて、ソロ活動と並行して室内楽でも演奏していきたい。自分の可能性に大きく挑戦してみたいと思います。



バッハ国際コンクール

最終選考では、バッハの無伴奏パルティータ第2番と、ヴァイオリン協奏曲を演奏

ので自分の中に危機感を生じませんが、ニュース映像には信憑性を感じて深刻になったりする。映像の本質としては代替可能なこの二つに、なぜ違いが生じるのか——こうした映像に対する真実性やリテラシーについて、とても興味を持ったのです。

そ

こで藝大大学院でメディア映像を専攻し、メディアの中のリアリティの問題を追求してみました。この大学院では展示形式の作品が特色でもあり、僕の作品もインスタレーションの性格を持つようになりました。それに加えて、これまで経験のなかった実写にもトライしてみた結果が『写場』という作品です。二〇一四年度の文化庁メディア芸術祭アート部門で審査委員会推薦作品となったものです。

『写場』

場』を鑑賞する人は映画を見ていると思っいるうちに、突然自分が撮影され、その写真が映像の中で取り出されます。鑑賞者は映像に対する自分の位置が不確かになって落ち着かなくなる。映像におけるリアリティや鑑賞者との関係性に、ある種の揺さぶりをかけるわけです。我々が普段何気なく接している映像経験とは何かという問題を体験として提示する作品を、今後もつくっていきたいと思っています。



『写場』

映画の中でカメラマンが肖像写真を撮っているが、カメラがこちらに向けられると、鑑賞者を撮影してしまい、その写真が画面に出現する